

自閉症児の対人関係認知に関する研究

— PFスタディによる検討 —

田 辺 正 友・田 村 浩 子*

(奈良教育大学障害児教育教室)

(平成11年4月16日受理)

キーワード： 対人関係認知、PFスタディ、自閉症児

問題の所在

自閉症の中核的な症状は、対人関係の障害にあるが、その背後に何らかの認知障害を想定したRutter(1983)の研究以来、その障害への認知論的究明が精力的に行われている現状にある。そして、現在、自閉症における対人関係障害を説明するためのいくつかの基本障害仮説が提唱されている。例えば、Hobson(1986)の「感情認知障害仮説」、Baron-Cohen(1989)、Baron-Cohen, Leslie & Frith(1985)の「心の理論障害仮説」、Ozonoff, Pennington & Rogers(1991)の「実行機能障害仮説」やFrith & Happé(1994)の「中枢性統合障害仮説」である。しかし、これらの仮説のいずれに対しても反論がある。自閉症における広範な多様性および自閉症にみられる対人関係障害、コミュニケーション障害、想像力の障害、儀式的・強迫的行動といった行動特徴、認知機能のバラツキ、サバンのスキルといったすべての症状を単一の基本障害で説明できるかどうかについては、さらなる検討が必要となる。

本研究は、こうした自閉症研究における現状を視野におきながら、自閉症児の対人関係認知における問題をさぐるためのひとつの手がかりを得ることを目的として、PFスタディによる検討を試みたものである。PFスタディ(Picture Frustration Test)は、24種の日常誰もが経験する欲求不満場面によって構成されており、どの絵も左側の話しかけている人物が右側の人物になんらかの意味で不満を起こさせている場面になっている。筆者らは、こうしたPFスタディの24種のフラストレーション場面は、それぞれ対人関係における状況認知場面を構成していることに着目し、以下の研究1と研究2を計画した。まず、研究1は、自閉症児のPFスタディにおける反応特徴を明らかにすることを目的としてなされた。さ

らに、研究2は、自閉症児のPFスタディの反応特徴を日常生活場面での対人関係認知のあり方の問題と関連させて事例検討することを目的としてなされた。対人関係の問題は、Wing(1992)も指摘するように高機能自閉症にあっても中心症状をなすものであるが、筆者ら(田村・田辺; 1996, 1997)は、認識発達の高次化や加齢に伴って、対人関係もその対象が広がり、関わり方の質・様式の変容が認められる結果を報告した。研究2では、こうした日常生活場面における対人関係の変容がPFスタディの反応結果にどう反映されるかについても合わせて検討を試みたい。

研 究 1

1) 目的

暦年齢(CA)と発達年齢(DA)をマッチングさせた自閉症児群と非自閉症児群(対照児群)のPFスタディの結果の比較検討から、PFスタディにおける自閉症児の反応特徴を明らかにする。

2) 方法

対象児 筆者らが発達診断活動で関わっている小学校および中学校障害児学級に在籍する児童・生徒であって、PFスタディの検査の意図を理解し回答することが可能であると考えられた児を対象とした。自閉症児群13名と対照児群14名の内訳を、表1に示した。自閉症児群は、3歳までに現在用いられているDSM-IVの自閉性障害の診断基準を満たす臨床症状・特徴を有していた。4名の高機能自閉症児(HIPDD)を含んでいる。対照児群は、主として、知的障害児であるが、2名の学習障害(LD)と考えられる児が含まれている。両群のCAおよび新版K式発達検査による全領域、認知・適応領域、言語・社会領域のDA間には有意差はみられなかった(t検

* 現在 本学非常勤講師

表1 対象児

自 閉 症 児 群					対 照 児 群						
対象児	性別	C	A	D	A	対象児	性別	C	A	D	A
				全領域	認知・適応	言語・社会			全領域	認知・適応	言語・社会
1*	男	10:5	9:11	9:11	9:9	1	男	9:10	7:11	9:0	7:5
2	女	10:9	7:9	7:9	7:5	2*	女	12:6	13:4	13:4	13:1
3*	男	11:1	10:9	11:2	10:8	3	男	12:10	7:8	7:9	7:9
4*	男	12:0	11:9	11:11	11:3	4*	女	13:6	13:4	13:0	13:4
5*	男	12:11	11:4	10:5	12:6	5	男	13:7	7:7	7:6	7:10
6	男	13:0	7:4	6:11	7:5	6	男	13:10	8:3	9:0	7:9
7	男	13:4	8:6	9:0	8:0	7	男	14:3	8:11	9:0	8:10
8	男	13:9	8:8	9:6	8:0	8	女	14:3	10:0	10:10	9:5
9	男	14:0	8:3	7:9	8:7	9	男	14:7	7:9	6:6	8:7
10	男	14:4	8:11	9:0	8:10	10	男	15:1	7:9	7:9	7:9
11	男	14:5	7:6	8:7	7:1	11	男	15:3	7:8	6:11	8:0
12	男	14:5	8:0	7:9	8:0	12	女	15:3	10:6	10:10	10:4
13	男	14:9	10:9	10:5	11:3	13	男	15:4	9:10	9:0	10:4
						14	女	15:4	11:1	11:5	10:8
平均		13:0	9:2	9:3	9:2	平均		13:11	9:5	9:5	9:4

注) *¹ 高機能自閉症児, *² 学習障害児

定)。

分析資料・手続 PFスタディ児童版を個別に実施した。PFスタディの評定は、林ら(1987)の解説書に従って2名の評定者(筆者)が個別に行った。評定者間で差異がみられた場面については協議して再度評定を行った。

3) 結果と考察

自閉症児のPFスタディにおける反応特徴

両群のPFスタディの結果を簡単にまとめたものが、表2-1および2-2である。PFスタディのテスト場面は、人為的、非人為的な障害によって直接に自我が阻害されて欲求不満を引き起こしている場面(自我阻害場面、16場面)と、誰か他の者から非難、詰問されて、いわゆる超自我が阻害されて欲求不満を招いた場面(超自我阻害場面、8場面)からなっている。そして、その評定は、24の欲求不満場面における反応語の内容を、1) どんな方向に攻撃をむけているか—他責的(E-A)か、自責的(I-

A)か無責的(M-A)かといった主張の方向に関する次元と、2)それはどんな型か—障害優位型(O-D)か、自我防衛型(E-D)か、要求固執型(N-P)かといった次元の組み合わせから成る9種類(3x3)と、さらに、超自我阻害場面における2種類の変形を加えた計11評定因子によってなされる。

まず、自閉症児群にあっては、反応語それ自体は文章表現としてはおかしくないが、その反応が相手の発したことばに対する応答としてはつじつまのあわない反応であって、PFスタディの11種類のどの評定因子にも分類しえない反応—評価不可能反応が、すべての対象児に出現している。その平均出現数は、6.5場面(2場面—12場面)であった。対照児群にあっては、14名中の4名に1ないし2場面の出現であった(平均出現数、0.4)。両群間の評価不可能反応の出現数間には、0.1%水準で有意差がみられた(t=7.44, df=25)。

表2-1 PFスタディ結果(自閉症児群)

対象児	評価不可能 総数(/24)	G C R			プロフィールの特徴	
		% 超自我場面(/6)			高 値	低 値
1	12	33	2	N-P	E-D,E,F,I,M	
2	5	58	5		O-D,E	
3	5	50	4	N-P,E-A,e	O-D,E-D,E,E,M	
4	4	25	3	E-A,E	M-A,I,m	
5	8	25	3	E-D,E-A,E	O-D,N-P,I-A,M-A	
6	2	79	4.5		E	
7	10	25	1	O-D,N-P,E-A,E	E-D,M-A,M'E,I,M	
8	3	50	4		I,M	
9	11	33	1		E-D,E,I,M	
10	7	8	0	O-D,N-P,E-A,E,e,f	E-D-A,M-A,E,I,M,m	
11	7	38	1.5	I	I	
12	6	56	2	O-D,E,F	e,I,M	
13	5	63	6	E,I,m	e,I,I,M	
平均	6.5	42				

表2-2 PFスタディ結果(対照児群)

対象児	評価不可能 総数(/24)	G C R			プロフィールの特徴	
		% 超自我場面(/6)			高 値	低 値
1	0	33	3	O-D,E,M'	N-P,e,I,m	
2	0	38	3.5	E-A,E,I	M-A,I,I,M,m	
3	0	29	3	E-D,E-A,E	O-D,M-A,E,I,M,M,m	
4	0	29	3	O-D,E-A,E,E,M'	N-P-A,M-A,I,I,M,m	
5	0	50	2.5	E-A,e	I-A,I,i	
6	0	83	6	E	e	
7	2	25	0	O-D,I-A,E,I'	E-D,N-P,E,e,I,i,m	
8	0	67	3.5	N-P,e,i,m	E-D,E,I	
9	0	38	2.5	O-D,I,M'	I,M	
10	1	33	1	N-P,I-A,i,m	E-D,E-A,E,I	
11	0	75	4	N-P,I-A,i	E,M	
12	1	50	2	N-P,I-A,I,i	E-D,E-A,E,I,e,I	
13	0	58	3	E-A,e	i,M	
14	1	46	4		E,M	
平均	0.4	47				

表3 自閉症児群における評価不可能反応の特徴

対象児	評価不可能反応	特徴
1	1, 3, 5, 7, 8, 9, 10, 11, 16, 18, 19, 23	①, ⑤
2	3, 8, 16, 20, 23	①, ④
3	3, 5, 16, 21, 22	①, ②, ④
4	3, 5, 13, 16	①, ③, ④
5	3, 11, 13, 15, 16, 17, 19, 23	①
6	3, 19	①, ②
7	1, 3, 5, 7, 8, 14, 18, 19, 121, 23	①, ②, ③
8	3, 13, 16	①, ③
9	2, 3, 6, 7, 8, 9, 11, 12, 16, 20, 21	①
10	3, 7, 11, 12, 16, 18, 22	①, ②, ④, ⑤
11	3, 6, 7, 9, 16, 20, 23	①, ②, ④
12	3, 7, 8, 13, 16, 19	①, ②, ③, ④
13	3, 5, 10, 13, 16	①, ②, ③, ④

注) 特徴① 記述してある全体の意味に反応しないで、絵の吹きだしのことば(刺激語)の一部にのみ反応した結果として、
 とんちんかんなものになっている反応、あるいは全くとんちんかんない反応
 (例) 場面3 「しゃべることがありますよ」「あつたんだよ」「約束してあつたんだよ」「かんそうぶんをかかせてもらった」「場面5 「わかなくなるから」「場面8 「いやよ」「しょうりはできない」
 ② 状況をそのまま承認あるいは状況を描写した反応
 (例) 場面8 「こわれたの」「場面13 「にげる」「場面19 「あしちやうた」「わーん、ぬれちゃった」「場面22 「だっておくれたから」
 ③ 要求に自己中心的に固執した反応
 (例) 場面1 「まだある」「場面13 「とりたいたもん」
 ④ 主客が転倒している反応
 (例) 場面16 「ごめんなさい(おかあさん)」「場面23 「ごめんなさい」
 ⑤ 刺激語のことばの一部を反響言語的に繰り返した反応
 (例) 場面1 「ありませんよ」「ちう、おかしもない」「場面2 「スケートかえしてよ」「場面7 「花をつんだりして」

表4 自閉症児群における評価不可能反応の多い場面の特徴分析

特徴	場面 3	16	7	5	8	13	19	23	出現率 (%)
1	13/13	5/11	2/6	4/5	3/5	1/5	3/5	2/5	59
2			1/6	1/5	1/5	1/5	1/5	2/5	10
3			1/6		3/5				7
4		6/11						1/5	9
5			2/6		1/5		1/5		9

注) 出現率は、自閉症児群の評価不可能総数85に対する各反応特徴の出現数の割合

自閉症児群における評価不可能反応の出現場面とその特徴を、表3および表4に示した。なお、特徴の①-⑤は、井原ら(1982)を参考にしてまとめたものである。全員評価可能であったのは、場面4(「おもちゃの自動車の修理ができないといわれている場面」)のみであって、他の場面は1名(場面2,14,15,17)から13名の評価不可能反応が出現している。評価不可能反応の出現が非常に多かったのは、場面3(13名,100%)と場面16(11名,85%)であった。次いで、場面7(6名,46%)および場面5,8,13,19,23(いずれも5名,38%)であった。

自閉症児群の全員に評価不可能反応が出現した場面3(「時間中にしゃべったので、残されたことについて相手からの弁解をきいている場面」)での反応特徴は、例示したような、記述してある全体の意味に反応しないで絵の吹きだしのことば(刺激語)の一部にのみ反応した結果として「とんちんかん」なものになっている反応、あるいは、まったく「とんちんかん」な反応であった。この反応特徴に属するものは、他の場面でも多く出現し、

全体で59%の出現率であった(自閉症児群における評価不可能反応総数85に対して50反応)。なお、対照児群では1反応のみの出現であった。場面16(「自分のボールを他の小さな子にとられた場面」)の反応特徴としては、「ごめんなさい」、「ごめんなさい、お母さん」といった主客が転倒している反応を指摘することができる(場面16での評価不可能反応総数11中の6反応、55%)。非常に高い出現率であるが、この反応特徴は対照児群でも2名の児にみられており、自閉症児に特異的な反応とはいえないようである。刺激語のことばの一部を反響言語的に繰り返した反応、いわば書きことばにおける反響言語は、対象児1と10で出現しているが、そのほとんど(89%)が対象児1にみられた反応特徴であった。

こうしたPFスタディにおける自閉症児の反応に示される特徴は、それぞれの場面における対人関係の状況に合わない反応であるという点で共通している。そして、この結果は、日常生活場面で自閉症児の対人関係のあり方で指摘される問題とも関連しているといえよう。自閉症児群のPFスタディの結果で評価不可能反応が多かった場面と少なかった場面についてのそれぞれの場面状況分析から次のことが指摘できよう。評価不可能反応が0あるいは1反応であった場面4,2,14,15,17での対人関係の場面状況が直接的関係であるのに対して、場面3での弁解場面および場面16での3人の関係を考慮しなければならぬ場面は、前者の場面よりもより間接的関係における認知状況場面である。

次に、評価可能であった反応について検討するために、両群で評価不可能反応が出現しなかった唯一の場面4と自閉症児群には評価不可能反応が多く出現したが対照児群では出現が少なかった場面16での両群の個々の反応を表5に示した。場面4での自閉症児群の反応は、E,E,eといった評価因子にみられるように欲求不満場面における反応の方向が、他責的な方向に限られている。しかし、対照児群にあっては自責的あるいは無責的な反応の方向も出現し、反応が多様になっている。さらに、評価因子「よし、がんばってこの自動車を直してやる」、「自分でなんとかなおす」などの自責固執反応(4/14)といった自己関与的表現がみられるのである。場面16の評価因子からも対照児群にあっては反応における多様性が示されている。こうした特徴については、研究2の事例研究でさらに検討を試みたい。

GCR(Group Conforming Rating)%は、個々の被験者の欲求不満に際しての反応が、その被験者の年齢にふさわしいものかどうか、社会適応性はどうかを調べる指標とされている。表2-1,表2-2に示したように、本研究での自閉症児群および対照児群ともに当該年齢段階のGCR%(小3・4、54%-中3、66%)に比してかなり低い値であった。この結果は、石坂ら(1997)の結果とも一

表 5 自閉症児群と対照児群の反応における比較

対象児	場面 4		場面 16	
	自閉症児群	対照児群	自閉症児群	対照児群
1	できればなおしてよ e	あきらめるよ M	どっちでもいいよ	このこはわるいこだ E'
2	なおしてよ e	じゃ、ほかの子に なおしてもらおう	ごめんなさいお母さん	いえいえあげるわ、その うちかうからしんびんの うるさい E
3	おとうさんになおして もらいます e	自分でなおせる i	だってあそびたいから	
4	どしてもなおして ほしいな e	だったらおニューの かってよ e	だってボールあそびを したいのに	いいんです、後で注意 してください M:E
5	なおすまで めしぬきだ！ E	なんとかしてよ e	じゃなくって ボールにしよう M	きをつけたらいいから
6	自動車屋になおして もらう e	そんな、きにいった のに E'	かえして e	いいよ M
7	うごかないよー E'	こまった、こまった E'	かしてよー e	かしたってるから ちいさいこほだめね E'
8	お母さんなおして、 なおして e	いやだなおしてよ e	わるい	もう大きいのだから小さ いこにかしてやったの M
9	おもちゃやさんに しゅうりに出す e	どうすればなおるの E'	大きいから M'	もういいよ M'
10	なおしてよ e	よしがんばってこの 自動車を直してやる i	あたもうって いたよーえ〜ん	もうしません 絶対しません
11	お父さんにつくって もらう e	自分で修理屋に行く i	ごめんなさい e	かえして e
12	どうしてなの E'	いい自分でなんとかなおすから おかさんはむこうにいてよ i	ごめんなさい	ごめんなさい もうしません
13	えーなおせないの E'	じゃ新しいのを買って e	ごめんなさい！	それわたしのよ かえしてよ e
14		お父さんにたのんで みる e		いいのそんなこと 言わないで M'

致するものである。当該年齢段階の標準％に近い値であった対象児は、自閉症児群:対象児 2、3、13、対照児群:対象児 8、11、13の各々 3 名であった。両群の他の対象児は標準の GCR％に比して 1 標準偏差値以上の開きのあるものであって、とくにほとんどの対象児が標準より低い値であった。平均 GCR％は、自閉症児群では 42％(8%-79%)、対照児群では 47％(25%-83%) と自閉症児群の方が若干低い値となっているが、両群間には有意差はみられなかった。さらに、標準％の値であった自閉症児群の 3 名の GCR の評点と合致している場面を吟味してみると、超自我阻害場面での合致率が高かったという結果を得た。対象児 2 は 6 場面中の 5 場面 (83%) で、対象児 3 は 4/6 (67%)、対象児 13 は 6/6 (100%) であった。このことは叱責を受けたり、非難された時には人一倍自責の念を抱いて適応しようとするを示しており、適応のしかたに偏りを有していることが指摘されるのである。

プロフィール欄での特徴として、反応の型・方向および個々の評定因子について標準値から 1 標準偏差値以上の開きのあるものを高値あるいは低値として表 2-1、表 2-2 中に示した。先に指摘したような場面(4、16) によっては、反応における傾向性がみられたが、全体的にみると自閉症児群としての一定の傾向は示され得なかった。評価不可能反応が多数出現したので、個々の評定因子の値の比較については妥当性も低いと考えられる。この点に関しては別の観点からさらに検討を加えたい。

研 究 2

1) 目的

PF スタディにおける自閉症児の反応特徴を日常生活場面での対人関係認知の問題及び認識発達の高次化、加齢に伴うその変容の問題と関連させて検討するために、ひとりの自閉症児についての事例検討を試みる。

2) 方法

対象児 1986年7月生まれ、現在12歳の中学校障害児学級に在籍(1年生)する男児。家族構成は、父・母・姉・本児の4人家族。生下時体重3296g、満期産、自然分娩、始歩11カ月。10カ月に「マンマ(食物)」と初語があってから1歳6カ月頃までは語彙数の増加(10語程度)がみられたが、その後、徐々に消失している。再び発語がみられたのは2歳10カ月時であった。脳波異常、てんかん発作等の問題は現在までみられていない。2歳

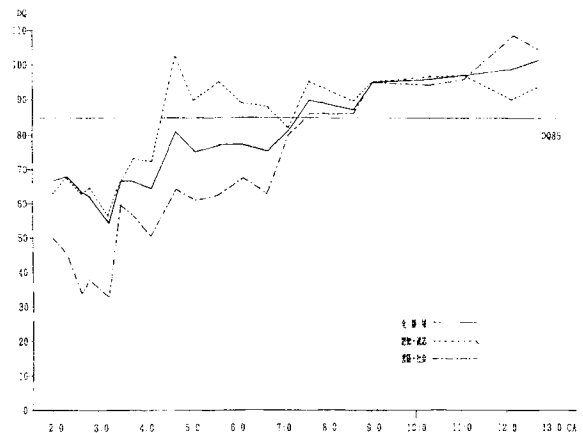


図 1 新版 K 式発達検査結果の発達指数(DQ)の変化

表6 対人関係・コミュニケーション機能の変容

年 齢	9 : 0	10 : 0	11 : 0	12 : 0	13 : 0
認識発達	<p>◆幼児期後期（発達年齢7歳頃）</p> <ul style="list-style-type: none"> 個々の要素を関係づけ、系列化させて全体にまとめあげる力の獲得（「絵の叙述」「釣銭問題」「図形記憶」） 			<p>◆児童期前期への移行期（発達年齢9歳頃）</p> <ul style="list-style-type: none"> 具体的な諸関係から一般的な法則性をひき出す力（「時計の針」「記憶の玉つなぎ」）の芽生えはみられるが「語の類似」のようなことばの概念化、抽象化に弱さを残す 	<p>◆児童期前期（発達年齢10歳すぎ）</p> <ul style="list-style-type: none"> ことばの概念化、抽象化が一定程度可能となる（「3語類似」「反対語」）
対人関係	<p>◆受身的態度</p> <ul style="list-style-type: none"> 教師や年上の児のリードでゲームの遊びに参加する クラスメートや兄弟にからかわれると母親に解決を求めたり、ものに自分の怒りをぶつける（ぬいぐるみを叩く等） 			<p>◆積極的態度</p> <ul style="list-style-type: none"> 教師が参加しているゲーム的遊びには参加して楽しむ グループ活動では指導者の指示でリーダー的役割を果たす 自分からお気に入りのクラスメートに電話をかけ遊びに行く約束をする 	<ul style="list-style-type: none"> グループ活動ではリーダー的役割を遂行するが命令的なことば「～しなさい」での指示が多い
コミュニケーション機能	<ul style="list-style-type: none"> 教師との会話はスムーズになるが、クラスメートの前では義務的に話をする はずかしいを理由に家庭でのできごとを日記や連絡帳に書くことを拒否することがある 劇遊びでは身体表現、言語表現のしかたに硬さが目立つ 			<ul style="list-style-type: none"> 話題が自分の都合の悪いこと及んでいくと意識的に話題を変更したり、「ソレハヒミツヤネン」と言う 自分の失敗や都合の悪いことについては、自分にとって肯定的になるように言い訳をする 獲得した知識を母親に何度も繰り返し伝えようとする 	<ul style="list-style-type: none"> 給食を食べながらクラスメートと簡単な会話をする
その他の行動	<ul style="list-style-type: none"> チック様のまばたきが見られる 学習やグループ活動場面で結果や評価を気にし始める 			<ul style="list-style-type: none"> 自分の障害について葛藤し始める 	<ul style="list-style-type: none"> 不安な時チック様のまばたきが目立つ

注1) ①～④は、新版K式発達検査の下位検査項目

時から筆者らが主催している教育相談・療育活動に参加している。療育活動に参加し始めた2歳後半頃には、1) SM-IVの自閉性障害の診断基準のA(1)-(a)(b)(c)(d)、(2)-(b)(d)、(3)-(a)の診断項目に合致する臨床症状・特徴を有していた。

分析資料・手続 ① 10歳3カ月と12歳7カ月の両時期のPFスタディ結果および2歳から適宜実施してきた新版K式発達検査。② 療育活動時の行動観察記録およびVTR記録。療育場面での行動観察記録は記述法によった。③ 母親による本児の歩みの記録および学校との連絡帳。④ 小学校での様子については定期的に実施した観察記録と担任教師への聴取、実践記録の資料。

3) 結果と考察

自閉症児の対人関係認知とPFスタディの反応特徴

まず、本児の発達過程と対人関係の変遷について概略しておきたい。CA2:0からCA12:8の間に適宜実施した新版K式発達検査の発達指数(DQ)の変化を図1に示した。図1から明らかなように、「認知・適応」領域では4歳後半に、「言語・社会」領域では3歳中頃と7歳初め頃に、発達指数の顕著な上昇が示されており、「認知・適応」領域では4歳後半から、「言語・社会」領域および「全領域」では7歳中頃(小学校1年後期)に、DQ85以上、つまり知的には正常範囲に入っている。また、新版K式発達検査による「認知・適応」と「言語・社会」領域のDQの差が3歳中頃に収縮し、その後拡大、

7歳以降は再び収縮するといった発達像が示されている。

本児の2歳から現在までのこうした発達の高次化や加齢に伴って対人関係・コミュニケーションもその対象が広がり、関わり方の質や表現内容・様式の変容が示される。乳児期後半から幼児期前期への移行期の発達段階(発達年齢1歳前半頃、CA2歳後半-3歳)で母親を愛着対象(特定の第三者)として形成し、その母親との関係を土台に、それ以降の段階で、療育教室の指導者や担任教師といった特定の大人へ、さらには、幼児期中期の発達段階(発達年齢4歳中頃、CA5歳後半-7歳)で年少児、クラスメートへと対人関係の対象を広げている。本児の対人関係は、発達の高次化および加齢に伴って、Wing & Attwood(1987)の「孤立型(alloof)」から「受動型(passive)」(幼児期前期の発達段階-発達年齢1歳中頃、CA3歳6カ月頃)へと移行し、さらには、児童期前期への移行期の発達段階(発達年齢9歳頃、CA11歳頃)から、「積極・奇妙(active-but-odd)」の傾向を呈しつつある。

表現内容・様式も自分の要求を一方向的に「クレーム現象」で、「指さし」で、といった前言語的コミュニケーションから言語的コミュニケーションへの移行過程を経て一語発語で「表現」する、そして、ことばがコミュニケーション機能としての一定の役割を持ち始め二語発語で「伝え」たり、ことばで「応答」することが可能になっている。現在、特定の大人との間で、自分が熟知してい

る場所・自分の興味・関心のある活動で、といったように、人・場所・場面は限定されるが日常的な会話が可能になっている。しかし、現在でも表6に示したような対人関係やコミュニケーション機能とくに表現機能における問題を有している。

表7 PFスタディの結果

C	A	GCR%	評価不可能反応	プロフィール	超自我因子
10:3	3	33%	5/24	低 I-A 高 E-A 低 M-A 高 E-A	低 E-E I-I 高 E-E I-I
12:7	3	33%	3/24	高 E-A N-P e	高 I E-I

本児のPFスタディの各場面における反応を図2に、それらをまとめたものを表7に示した。まず、評価不可能反応について検討を試みる。本児のPFスタディの評価不可能反応の出現場面は、CA10:3では、場面3、5、16、18、23の5場面、CA12:7では、場面3、5、16の3場面であった。その評価不可能場面の反応の特徴としては、すべての場面で、記述してある全体の意味に反応しないで、絵の吹き出しのことばの一部にのみ反応した結果として、「とんちんかん」なものになっている反応（例えば、場面3では、CA10:3「しゃべることがありますよ」、CA12:7「あったんだよ」）、あるいは、まったく「とんちんかん」な反応を指摘できる。

このような反応のしかたは、日常生活場面での会話のなかでもみられている。例えば、高校野球を見ながらの食事場面で、肉が焼けた時に母親に「これいけるよ」といわれて、「ひとりでは行けません」と言いながら、肉をとって食べる、あるいは、クラスメートのHがHが照っている様子を見て「急に夏になった」と言ったのを受けて、「急に夏にならへんで」と言った後、「もう、Eちゃん、プールすきやからな。女は花が好きで、男は電車が好き。マンガが好きな人もいる。男で・・・」といったように、会話にならずに独り言のようにつぶやき、内容が自己展開してしまう場面がみられる。このように、ことばの意味をとりちがえて「とんちんかん」な反応になってしまったり、ことばの一部にのみ反応したり、自分のイメージで話を自己展開して、結果的には「とんちんかん」な反応になっている。このように、その場の状況の判断のしかた、ことばの意味の理解・使い方に問題を残している。研究1で、自閉症児にあっては、PFスタディでの対人関係の場面状況が間接的関係における認知状況場面3、16で、評価不可能反応が非常に多いこと、その反応特徴が絵の吹き出しのことばの一部にのみ反応し

た結果として「とんちんかん」なものになっている反応、あるいは、全く「とんちんかん」な反応であることが多いことを指摘した。本児においても同様の結果が示されている。そして、その結果は、本児の日常生活場面の対人関係におけるコミュニケーション場面でみられる姿と一致することが多々あることが確認できるのである。

次に、表7に示したようにGCR%は、CA10:3,CA12:7ともに33%で、それぞれの年齢の標準%に比して非常に低い値である。さらには、合致した場面はすべて超自我阻害場面であり、社会適応性の低さが目立つとともに、その適応のしかたに偏りがみられる。プロフィール欄の特徴は、CA10:3では、I-A%（アグレッションの方向が自責的）が低く、E-A%（他責的）が高く、欲求不満の原因を他者や環境のせいにし、自分の責任に帰することが少ない反応が強い傾向が示された。CA12:7では、M-A%（無責的）が低く、E-A%、N-P%（アグレッションの型が要求固執型）が高く、しかも、E-A%、N-P%の高さは、e（他責固執反応）の強調に起因している。つまり、欲求不満の原因を他者や環境のせいにし、その解決を強く望んでいるが自分がその解決に関与することなく、他者に依存、救助、庇護を求める傾向が強い。また、超自我因子欄では、CA10:3では、Eが著しく高く、I反応はほとんどみられず、I-Iも低く、自分を顧みて反省する姿はみられにくいといった特徴がみられる。CA12:7では、Iが高く、I-Iが低いことから、場面7、19、22での「だってーだもん」という反応のように、「一応悪いと思いつつも、あれこれ言い訳をして自分の失敗を認めよう」としない傾向がみられている。さらに、各場面の反応をみると、場面8、12では「私」「ぼく」の表現によって、より強く自分を主張したり、場面10、20では「だめじゃないか」と相手に対して強い口調で反応している。こうした反応は、CA10:3に比して自分を関与させている表現ととらえられる。

日常生活場面では、表6に示すように10歳頃は、自分にとって都合の悪いことに話題が及ぶと意識的に話題を変更したり、「ソレハヒミツヤネン」と言ってその事柄を回避するといった傾向がみられた。しかし、加齢や発達の高次化とともに、宿題を忘れたとき母親に「やった、と書いて」と連絡帳に肯定的に書かせたり、ピアノの練習を全くせずに先生のところに行ったとき、先生に練習していないことを指摘されると「わすれた」と言い訳をする姿がみられるようになってきている。また、クラスメートとの関わりも積極性がみられるようになってきているが、その関わり方は相手に対して「ーしなさい」といった命令口調である。

以上のように、本児のPFスタディの結果は全体的に欲求不満における反応の方向が他責的方向に限られている。しかし、本児は、言い訳をしたり、「私」、「ぼく」の

表現の使用によって自分をより強く主張する等の反応もみせ始めている。そして、日常生活場面でも、他者との関係において自分を関与させ、自分を強調しようとする姿がみられるようになってきていることから、今後、本児が社会との関わりを広げていくなかで、PFスタディの反応がどのように変容していくか、さらなる検討を試みたい。

総 合 考 察

PFスタディテストの24種のフラストレーション場面は、それぞれ、対人関係における状況認知場面を構成していることに着目して、自閉症の中核的な症状である対人関係認知における問題をさぐるためのひとつの手がかりを得ることを目的として、PFスタディによる検討を試みた。

自閉症児のPFスタディの反応結果において、反応語それ自体は文章表現としてはおかしくないが、その反応が相手の発したことばに対する応答としてはつじつまのあわない反応が、すべての対象児に示された。こうした反応は、歴年齢及び発達年齢がほぼ同一段階にある対象児群の非自閉症児群にはほとんど出現しなかった。PFスタディにおいて示された自閉症児の反応特徴は、それぞれの場面状況に合わない反応であるという点で共通しているが、こうした反応の出現をBaron-Cohenら(1985, 1989)の相手の心の状態や相手の考えを推測できないという「心の理論障害仮説」に求めるのではなく、石坂ら(1997)も指摘するように、それぞれの場面が理解できていなかったり、理解できていたとしても、それは場面全体に対する理解の仕方ではなく、その一部に対する断片的なものであったりするために生じる結果であると解釈することも可能であろう。PFスタディの24種の場面状況を分析した結果から、こうした自閉症児にみられる反応特徴は、対人関係における場面状況が直接的関係である場面よりも間接的関係における認知状況場面においてより顕著に示された。こうした結果は、自閉症にみられる対人関係認知の問題は、対人関係を構成する場面の認知構造とも関連させて把握していく必要性を示唆するものであると考えられる。

また、事例検討の結果から、PFスタディで示される自閉症児の反応特徴は、日常生活場面で指摘される自閉症児の対人関係認知における問題と一致する点の多いことが確認された。さらには、認識発達の高次化や加齢に伴う対人関係のあり方の変容は、PFスタディの反応結果に反映されることが示された。この結果は、PFスタディテストは、教育実践と関連させた自閉症児の障害理解へのひとつの有効な方法であることを呈示するものであると考えられる。しかし、PFスタディの自閉症児

への適用についての方法論的妥当性についてのさらなる検討も必要である。PFスタディの児童版の適用年齢は4歳からとなっている。PFスタディテストの意図を理解し、回答することが可能である対象児という点から、本研究での対象児は、発達年齢とくに言語発達レベルが7歳以上で、K式発達検査の項目の通過状況も加味しながら(例えば、「了解問題II、III」、「文章整理」の項目は、すべての対象児が通過、「絵の叙述」は、自閉症児の1名のみ不通過であった)、自閉症児群13名、対象児群14名で構成された。27名のうち小学校4-6年生は5名で、22名が中学生であった。研究2の対象児は、知的発達に遅滞のみられない高機能自閉症であった。

自閉症児を対象としたPFスタディの研究報告は少ない。井原(1982)が報告した7例は、小学校4年生から中学校1年生の知的発達レベルが比較的高い自閉症児である。石坂ら(1997)の6例は、高機能自閉症青年(16歳から19歳)である。渡辺ら(1996)の1例は、中学校2年生の知的発達レベルの比較的高い自閉症児である。本研究での対象児は、歴年齢及び発達年齢において井原ら(1982)の対象児とほぼ同じ段階であると考えられる。研究1で指摘した、個々の評定因子の値の相対的比較における問題も含めて、PFスタディの自閉症児への適用の方法論的妥当性については、さらに資料の積み上げによる検討が必要であろう。

引用文献

- Baron-Cohen, S. 1989 The autistic child's theory of mind: A case of specific developmental delay. *J. of Child Psychology and Psychiatry*, 30, 285-297.
- Baron-Cohen, S., Leslie, A. & Frith, U. 1985 Does the autistic child have a "theory of mind"? *Cognition*, 21, 37-46.
- Frith, U. & Happé, F. 1994 Autism: Beyond "theory of mind". *Cognition*, 50, 115-132.
- 林勝造・住田勝美・谷強ら 1987 日本語版ローゼンツアイク、P-Fスタディ解説 三京房
- Hobson, R.P. 1986 The autistic child's appraisal of expressions of emotion. *J. of Child Psychology and Psychiatry*, 27, 321-342.
- 井原成男・河野洋二郎・広司順一・帆足英一 1982 PFスタディとWISCへの反応からみた自閉症児のコミュニケーション特性 小児の精神と神経, 22, 105-110.
- 石坂好樹・村澤孝子・松村陽子・神尾陽子・十一元三 1997高機能自閉症にみられる認知障害の特質について
—心理テストによる検討— 児童青年精神医学とその近接領域, 38, 230-245.

- Ozonoff, S., Pennington, B. F. & Rogers, S. J. 1991
Excutive function deficits in high-functioning
autistic individuals: Relationship to theory of
mind. *J. of Child Psychology and Psychiatry*,
32, 1081-1105.
- Rutter, M. 1983 Cognitive deficits in the pathogene-
sis of autism. *J. of Child Psychology and
Psychiatry*, 24, 513-531.
- 田辺正友・田村浩子 1997 自閉症における行動特徴の
発達変容—ひとりの自閉症児の4歳から18年間の縦
断的研究、奈良教育大学紀要、46 (1)、313-321.
- 田村浩子・田辺正友 1996 自閉症児のコミュニケーショ
ン機能の発達と療育 奈良教育大学紀要、45 (1)、
191-200.
- 渡辺新・黒田吉孝・阪本健補・山田孝 1996 自閉症研究と
してのイディオ・サバンの問題 障害者問題研究、23
(4)、64-75.
- Wing, L. 1992 Manifestations of social problems in
high-functioning autistic people. In Schopler, E. &
Mesibov, G. B. (eds.), *High-functioning individu-
als with autism*. Plenum Press.
- Wing, L. & Attwood, A. J. 1987 Syndromes of
autism and atypical development. In Cohen,
D. J., Donnellan, A. & Paul, R. (eds.), *Handbook
of autism and pervasive developmental disor-
ders*. John Wiley.

Features on the Interpersonal Cognition in Autistic Children: Features Based on Results of the PF Study Profile

Masatomo TANABE and Hiroko TAMURA

(Department of Education for Handicapped Children, Nara University of Education, Nara 630-8528, Japan)

(Received April 16, 1999)

Many researchers have pointed out that one of the major deficits in autistic children is in the area of interpersonal problems. Interpersonal deficits are central symptom of the autism syndrom and a cognitive disorder is hypothesized to underlie this symptom.

This study is one of a series of study attempting to clarify the developmental problems and to seek for the appropriate educational care for autistic children. In this study, we attempted to clarify the problems of the interpersonal cognition in autistic children by analyzing the features on the Picture Frustration(PF) Study profile.

In study 1, we compared the features on the PF Study profile between autistic children group and intellectual handicapped children group that match with their chronological ages and developmental ages. Subjects were 13 autistic children and 14 intellectually handicapped children enrolled in elementary and junior high school classes for children with disabilities. The 13 autistic children had been diagnosed according to currently used criteria (DSM-IV). All of the children were given the PF Study Test individually.

In study 2, we analyzed the changes of the PF Study profile in relation to the cognitive developmental process in a high-functioning autistic child. The subject was a 12-year-old autistic boy. We are educating this boy from the age of 2 years in our class of remedial education for handicapped children.

The results were as follows:

- 1) Nonscorable scenes were very frequent in the responses of the autistic group in the PF Study, while they rarely appeared in the intellectually handicapped group.
- 2) The GCR% of the PF Study on both groups was lower than that of individuals of the same age.
- 3) The interpersonal problems on the daily life in a autistic child was reflected on the results of the PF Study.

On the basis of these results, we discussed the features of the interpersonal cognition on the daily life in autistic children.

Key Words: Interpersonal Cognition, PF Study, Autistic Children